

ICM

閉会式 基調講演

Midwifery “at the edge of history” ハンナ・ダーヘン

ハンナ・ダーヘンさんは、臨床助産師顧問として働く 40 歳のオーストラリアの助産師。ICM の最後を飾った彼女の基調講演「端に追いやられた歴史」は、とにかく終始パワフルで、聴いている者はどんどん元気になっていったと思う。

「助産師であること、母親であることは、私の人格形成をしている」と語り始めた。彼女は幼い頃、イエメンで暮らしていたことがあったが、そこでは女性が権利を持つことのない現状を、友人を介して知ったという。しかし、「女性が権利を持たなければ、出産時の母体死亡率を下げることはできない」と、女性を乗せたジャンボ機 1 機が 4 時間ごとに世界のどこかで墜落しているとたとえ、現状を説明した。

「産科医師は必要ないのではなく、すべての女性に必要があるわけではない。その代わり、すべての女性にスキルのある助産師が必要なのだ」と



講演中のハンナ・ダーヘン

(撮影／宮崎雅子)

いう語りには、大喝采が送られた。講演のなかでは、ほかにも「政治的な助産師でなければ辞めるべき。数が少なくても、そのほうがいい」「将来を予測するのではなく、形作るべき」など、積極的かつ力強い発言がちりばめられ、多くの助産師を鼓舞していた。

(編集室)